

# 学校教員養成系大学における 図画工作科・美術科に関する指導力点検方法の一例

向野康江\*

(2016年10月28日受理)

Example of Leadership Inspection Method for Art Education at a School Teacher University

Yasue KOHNO

キーワード: 図画工作 美術 教材開発 国際理解 アンケート作成

教師の指導力向上にねらいを定め、教材開発方法の必要性を啓発するようなアンケート、いわば教員養成課程の学生のためのワークシートを考案した。アンケートの構成は、学校での基礎基本習得度の確認、児童画に関する関心度、他教科との連携意識確認、教材研究の要点確認という内容で組み立てた。特に、児童画に関する関心度アンケート案では、縦軸認識（歴史的観点で）のアンケートと横軸認識（外国との比較で）のアンケート案を作成した。これらのアンケートは指導方法の授業でワークシートとして活用することもできる。図画工作科・美術科に関する指導力点検方法の一例をしめしながら、授業の論理性を確認しながら教材研究を行う必要性へと誘っている。

## はじめに

日本の学校における美術教育には様々な問題点がある。1つは、造形遊びに関する問題点、もう1つは、鑑賞教育に関する問題点である。前者は、「楽しい造形活動」をどう評価するのか、という視点があり、就中、開放感を味わうことをねらいとする教材では、開放されただけの活動の内面的楽しさに、どのような評価を課せばよいのか、未だにその課題は残る。後者では、鑑賞教育の教材開発の目的をどこに置き、鑑賞指導の方法論をどう確立すべきか、という問題を抱えている。

特に鑑賞教育における学習目標の設定には、注意を払う必要がある。発達段階、その作品を鑑賞する意義、内面的な効果等にかかなり神経を使う。『茨城県教育研修センター研究発表会図画工作・美術分科会資料』（平成13年3月）によれば、小学校教師の7割が鑑賞指導の方法がよくわからないと回

---

\*茨城大学教育学部

答していたことを思い出す。当時、センターでは、独立した形での鑑賞学習の機会を設定しなかったことの現れと見ていた。学習指導要領の「B鑑賞」は、中学校では小学校の基礎的内容を発展させ、「心情理解」「美術の方法理解」「美意識理解」「国際理解」の要素で構成されていた。ところが、その指導書を読むと「心情理解」が強調されている感があった。アンケートでも、中学校教師の意識が「心情理解」に重きを置く結果となっていた。一方、同センターの学習者に対するアンケート内容のうち、「どんなところがわかると絵や図案が楽しく見られるか?」の問いに対する小学5年と中学2年生の回答は、ともに「技法」が51.7%、「内容」が30.5%。「作者の心情」は小5で12.4%、中2も19%と少なかった。つまり「技法」への関心度の方が高かったという。技法への関心が高いということは、社会的に好ましい結果ととらえることができる。潜在的生産能力とかかわるからである。

実は、学校教員養成系大学における図工・美術科教員養成における指導方法の問題点とも、上記の内容は関係する。造形遊びと鑑賞教育における共通の問題要素は、内面的楽しさ、内面的な効果等を育成要素に抱え込むことにある。もちろん、造形遊びによる技術・技法の養成、鑑賞教育による美意識の形成、異文化への理解等、様々な目的をいくらかでも設定できる。一方、その目的を達成するための構造的な計画のもとでの教材開発力が教師に求められる。その教師の教材開発力ならびに指導力の低下が、図画工作科・美術科における問題と直結する。本稿では、教師の指導力向上にねらいを定め、教材開発方法の必要性を啓発するような、アンケート案、いわば教員養成課程の学生のためのワークシート案を考案する。実際の図工・美術科における指導方法、美術教育概論などの授業で、ワークシートとしても活用することを前提にする。

### 学校での基礎基本習得度を確認するアンケート案の作成

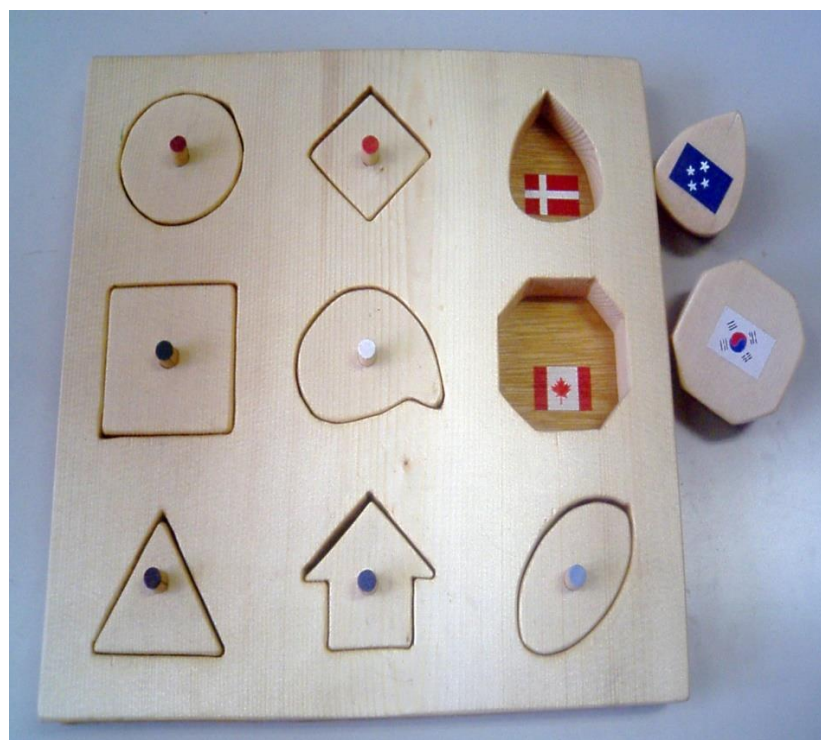
まず、教員自身が次のアンケートにどれだけの自信をもって解答できるのか、確認するのがよい。次の問題にどれだけ答えられるだろうか。

#### アンケート案1

設問1	画用紙の裏表の見分け方について、今までどのような見分け方をしていましたか。
回答	
設問2	設問1の、画用紙の裏表の見分け方は正しいと思いますか。
回答	思う      自信が無い      思わない      わからない
設問3	あなたは水彩絵の具で絵を描くとき、どのようなパレットの使い方をしてきましたか。
回答	
設問4	設問3での使い方は正しいと思いますか。
回答	思う      自信が無い      思わない      わからない
設問5	小学生のころ、のこぎりの使い方を学校で学びましたか。
回答	はい      いいえ

設問6	自分のこれまでの、両刃のこぎりの使い方を述べてください。
回答	
設問7	設問6での両刃のこぎりの使い方は正しいと思いますか。
回答	思う 自信が無い 思わない わからない
設問8	接着剤の学習をしたことはありますか。
回答	ある ない 覚えていない
設問9	接着材の選び方の要点を知っていますか。
回答	① 知っている ②知っているが自信が無い ③知らない
設問10	設問9で①、②と答えた人は、どこで学びましたか。
回答	学校で 家庭で 自分で その他
設問11	次に紹介する画像を観て、造形遊びであると判断するほうの記号に○をつけ、選んだ理由も述べてください。また、選ばなかったほうに対しては、その理由も述べてください。
理由A	
理由B	

A



めくって覚える世界の国旗パズル (対象学年：小学6年生) 近藤知佳 作成



設問 1、2、3、4は、描画教育の基礎基本を習得できているか否か、を問う。設問 5、6、7は、日本の自然環境に応じて発達してきた木材文化に関する問いである。その基本がのこぎりの使い方にある。設問 8、9、10 は、工作、立体造形を作成する際に必ず必要となる接着剤について、どのような接着剤がどのような素材に有効であり、どのようなものに無効であるのか、その学習機会を得られてきたか否か、を問う。設問 11 は、昭和 52 年度の学習指導要領以降、「造形的な遊び」として設定された、造形遊びがどれほど意識され理解されているのかを問う。

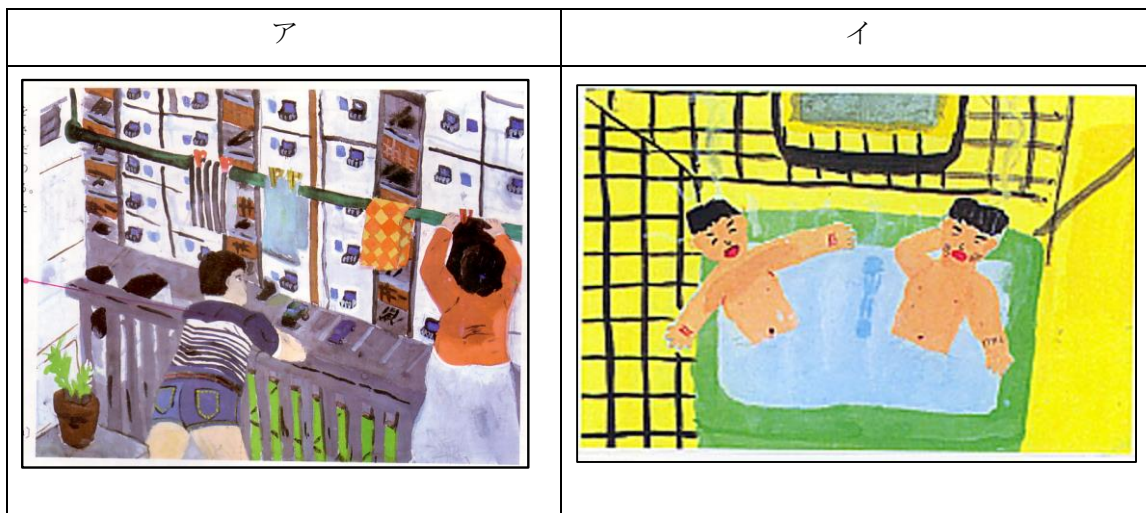
### 児童画に関する関心度アンケート作成

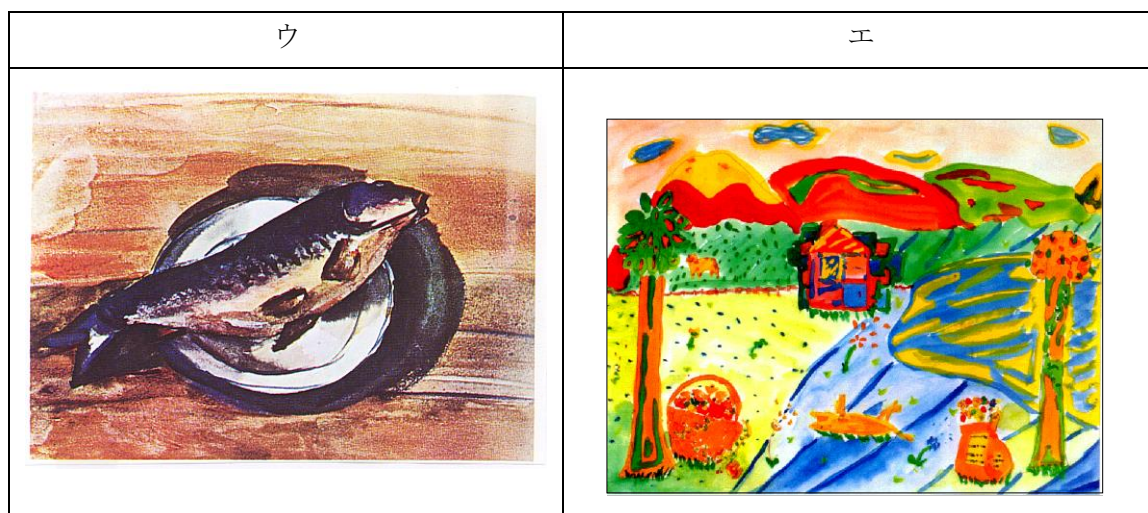
#### 1. 縦軸認識（歴史的観点で）のアンケート作成

次に、教師自身が児童画すなわち児童作品にどれだけの興味関心を所持しているかを確認するアンケート案を作成した。

#### アンケート案②

A. 次のアイウエの児童画を見て回答してください。





- 設問（１）ア、イ、ウ、エは、それぞれ小・中学校の何年生の絵でしょうか。
- 設問（２）ア、イ、ウ、エを比較した場合、それぞれいつの時代の児童画だと思いますか。
- 設問（３）ア、イ、ウ、エの児童画では、それぞれ大人のどのような意識が反映されているのでしょうか。分析してください。

上記のアンケートの設問（１）の正解は、ア、イ、エが小学校５年生、ウが小学校の６年生の絵である。設問（２）の正解は、ア→昭和61年、イ→平成4年、ウ→大正12年、エ→平成7年である。つまり、アは、昭和61年発行の小学校5年生用の図工教科書所収の児童作品<sup>1)</sup>、イは、平成4年発行の小学校5年生用教科書<sup>2)</sup>、ウは、大正12年発行の小学校5年生の児童画<sup>3)</sup>、エは、平成7年発行の小学校5年生用教科書<sup>4)</sup>に掲載された作品である。設問（３）によって、ア、イ、ウ、エの児童画における表現効果に大きな変化があるのは、それぞれその時代の大人の要求が反映されていることを知るべきであろう。こういった経緯を経て、今日の美術教育の姿を理解することは、次の世代の育成を担う教師にとって重要なことであると考えられる。

## 2. 横軸認識（外国との比較で）のアンケート作成

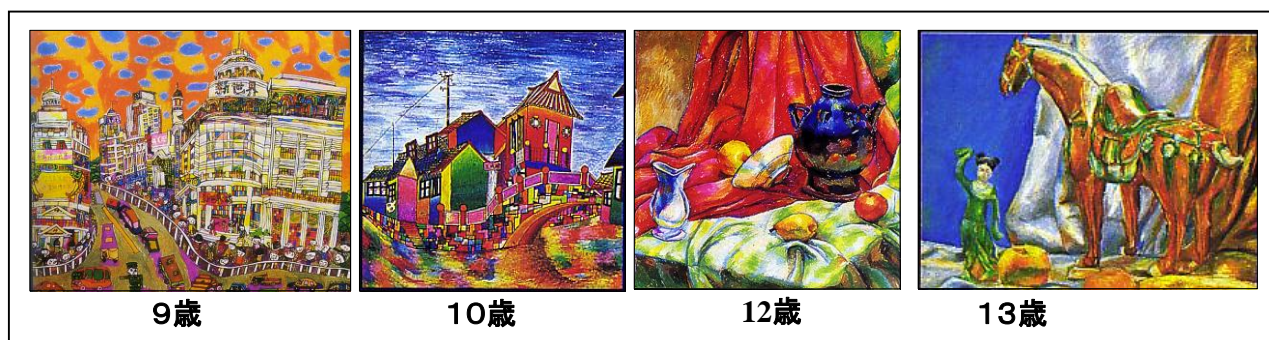
教師自身が外国における美術教育の動向に対して、どれほどの関心を所持しているかを確認するアンケート案を作成した。このアンケートによって、日本の児童画作品を客観的に見ることができるようになる場合もある。

### アンケート案3

B. 下記掲載の外国の児童画について次の設問に答えてください。

- (1) どこの国の児童画だと思いますか。
- (2) 次の観点で意見を述べてください。

①線、形 ②観察力 ③主観性・客観性 ④雰囲気、表現方法 ⑤造形力、迫力 ⑥その他



これらの児童画は『98“桜花杯”上海少幼児油画棒大賽作品集』より抽出しているので、設問(1)の解答は、中国児童画である。設問(2)に対する回答は様々な内容になると予測できる。そこで、外国から見た日本の児童画について記述しておきたい。外国人は日本の児童作品をどう評価しているか、という問題である。2000年の講演会(8月20日、上海)で、日本の小中学生の絵(『教育美術』704号所収作品、教育美術振興会、2001年2月1日)に対する受講者の意見を聞いた。その一部を紹介しておく。

中国児童画は色彩が鮮明で形も正確に描かれ、物事の外見表現を追及している。この点では日本より優れている。日本児童画は繊細で感受性を追及し、非常に生き生きしたものがあり、生活観に満ちている。日本の美術教師は、技法の指導より学習者の考え方を重視し、新しいものを発見する能力を育てようとしている。日本児童画の繊細で心のこもっている点が私に深い印象を与えた。作品は技術的、技法的に優れていないかもしれないが、決して幼稚なものではなく個性豊かである。芸術はかくあるべきだ(当時・学生18歳)

中国児童画は技法を重視し、色が鮮やかである。日本児童画は楽しい雰囲気を持っている。日本の美術教育方法を中国の美術教育の中に取り入れるべきである(当時・教師28歳)

これらの意見は、長年構築してきた教育技術の成果を代弁し、実に我々日本人を励ましてくれる。創造性と個性発揮の強調、学習者への情報と環境の提供、教師が児童の考えかたを大事にしていることも、彼らはきちんとわかっていた。この点では「がんばれ日本教師！」とエールを贈りたい。しかし、日本の児童画に肯定的意見を示したのは2割足らずであり、

- ・日本の教育方法は児童の創造性を発揮させ、児童期の才能を伸ばすのに役立つものの、専門的な技術訓練としては必ずしもうまくいくとは思えない。
- ・日本の教育は個性を重視するが、技能は比較的弱い。

というのが全般的な意見であった。「下手も個性のうち」とか言って、技術・技法を重視しなくなった姿勢を外国人は容易に見抜いている。確かに、16年前の日本の児童画は画面要素が豊かになり、コピー力に加えて、ある種の生命力の満ち溢れた絵が多くなっていた。同時に、描画発達段階上、

小学校高学年で獲得されるはずの遠近・陰影法が獲得されていないなど、幼稚な絵も多くなっていた。児童画は大人の意識や要求を如実に反映するものであり、要は、中国上海人に指摘された日本児童の絵の欠点は、我々大人の意識の欠落部分でもあった。本来、日本は「技術王国」と評され、ものづくり、手先の技術からくる発想を大切にしてきたわけだから、再度原点に立ち戻って、画面技法（遠近・陰影・構成・分割・拡大法など）、水彩絵の具の技法、パレットや筆洗の使い方、両刃鋸・刃物の正しい使用法、接着剤の学習、画用紙の裏表の見分け方にいたるまで、基礎基本的な内容を学ばせ、自分が設定したイメージ通りのものを着実に作りあげる技能を育てないと、現実的な「つくる喜び」は得られないであろう、と当時の傾向に懸念を抱いた。

16年前のこのような思いは、現在でもなお、戦後の美術教育スタンスを守り続けている美術教育界の研究のありように対する思考転換を要求せざるをえない欲求に変化してきた。そのためにも、造形教育、美術教育の機会や時間確保を目指すべきであり、他教科との連携が重要になってくる。

### 他教科との連携意識確認のアンケート作成

日本の美術教育は、東アジアが範疇に入れている美的創造力を必要とする内容のほとんどを他教科に譲ってきた。折り紙などがその例である。折り紙は家庭科の中で扱われることのほうが多くなった。染色、刺繍などもしかり。盆栽などの栽培は今や技術科の範疇にある。やることを手放せば、時間数が削減されていくのは当然で、図画工作科や美術科の授業時間数の確保を現実的な形で補うならば、他教科や「総合的な学習の時間」と連携するのも一案である。同時に、連携カリキュラムと教材開発案を考案する必要が生じる。そこで、次のようなアンケートを実施し、どのような連携案、教材開発案が作成できるのか、検討のためのアンケートを作成してみた。

#### アンケート案4

設問1：学校における図工・美術の授業数が減少するとどのような現象が起こりますか。
設問2：図工、もしくは美術の教科を他教科と関連させた新観点の教材開発について、どのような授業を想起しますか。
設問3：新教材を考案した場合、難しい対象だからと授業者が避けてしまわないようにするには、どのような手立てが必要であると思いますか。

大幅に削減された図画工作科や美術科の授業時間数分を、どのように補えるのか、他教科と連携するのも一案である、ということに気づかせることが要点であろう。気づくのはあたり前のことのように思えるものの意外とそうはいかない。たとえば、美術科の鑑賞教育と国際理解を関連させた新観点の教材開発を可能にする材料が目の前にあったとして、小中高等学校の『学習指導要領』にそういった方法が許容されていても、鑑賞教育と国際理解との意義づけが難しい場合がある。異文化認識を美術作品の鑑賞を通して正確なものとするのは悪い方法ではないのに、横断的、総合的な課題ほど内容の獲得量にバラツキを生じる。このような事態をさけるために、授業者は、学習者に

情報を与えて学習の方向を定め、学ぶべき、身につけるべき教科内容の基礎基本をきちんと学習計画に組み込んでおく必要が生じる。この点が授業者にとって面倒なのである。

一例を示すと、東アジアにおける異文化理解については、中国大陸文化が日本周辺に伝播している。特に玉文化は、人間と自然との歴史的かかわりを示してくれる美術品である。中国人は各自の玉を身につけ信仰対象として大切にしているし、高度な技術で優れた玉の美術品を歴史的に生産してきた自負がある。ところが日本人は、このような玉文化をもたず、勾玉に玉文化の反映を推測するに留まる。つまり、勾玉に古代のロマンは感じて、玉文化を所有するアジア人同様の美意識を玉作品に対して形成できているとは限らない。指導方法としては、感取能力の如何にかかわらず、我々日本人が玉文化に対する美意識を形成してこなかったのか、その理由を究明していき、学習者の興味関心を揺さぶることのほうが理想的であり効果的であろう。理由の究明過程で、相互の自然条件（地理・環境）や文化の成立過程（歴史）の違い等が明らかになり、異文化理解の糸口が見えてくる。

そのためにも授業者は、自らが異文化の美術品を探し求めることに力点をおくことが肝要である。難しい対象だからと授業者が避けてしまわないで、学習者の発達段階に応じて、理解可能な内容になるまで授業者がまずよく消化して、クイズ形式や取材方式を授業に用いて、発達段階に応じた方法に改良していけばよい。

### 教材研究の要点確認のアンケート作成案

#### 1. 教材開発に関する意識形成のためのアンケート作成

##### アンケート案5

設問1	穴あけ点描画というものを教材として作ってみました。これは、触覚を中心にした教材です。造形教育においてどのような意味をもつでしょうか。
設問2	教材開発を考える前に、図画工作・美術科の教科性というものについて、あなたはどのような考えが浮かびますか。
設問3	図画工作・美術科の内容を、少ない時間数で児童・生徒が充実感をもてるような教材を考える場合、どのようなものを考えますか。
設問4	教科書ばかりでなく教師による独自の教材開発を必要とする理由は何だと思えますか。
設問5	指導上、製作・制作過程で、学習者が自分で想像する部分・判断する部分を教材にあらかじめ設定しておくとしたら、どのような場面ですか。
設問6	対象学年の設定について、自分が考えた教材（題材）について、なぜその学年でその題材を取り上げるのか、その必然性について必ず考えたことはありますか。

アンケート案5の設問1は、目をつむって画の表面を触ると不思議な感じが伝わってくることを感じさせ、視覚だけではなく、感覚全体をつかった教材開発というのも興味深いことに気づかせるための設問である。



設問2は、教材開発を考える前に、美術科の教科性というものを再認識するためのものである。

図工・美術教科の教科性とは、

ア. 芸術の作用が成立しやすい分野である。

イ. 学校教育において、技術的役割から思想・内面表現・表出へ移行していった経緯をもつ。

ウ. 個性や個別性が発揮しやすい教科であり、創造性を育てる場になる。

エ. 学習するねらいによって、独自の評定を設定することができる手段をもつ教科である。

オ. 表出と感情移入によって心の浄化作用をもつ教科でもある。

という点を指摘できる。

さらに、アイデアスケッチなどで、あらかじめイメージ形成をしておく場合には、製作・制作する道標が明確になり、完成度を増すと同時に、技術力(量)を向上できる目安も明確にすることができる。何よりも、計画に対する自己確認ができる。自己確認をすることによって、イメージに沿って努力して完成する喜びを味わうことができる。一方、授業者(教師)にとっても、多種多様な表現を学習者から引き出すことができる教科なのである。

設問3は、基礎基本を重視し、基礎基本を実行・実現するためには、教師が授業の論理(教育技術、造形技術、評価・評定方法を含む)をきちんと所持していることが重要であることを認識させるための設問である。

設問4は、地域性ならびに国際性の獲得のために、やはり教材開発が必要であることを促すための設問となる。つまり、学校教育全体において、地域性と国際性は両輪のように関連し合っているものであり、そのバランスを欠くものではない。よって、教科書ばかりでなく教師による独自の教材開発を必要とされるのは、教科書は全国配布を対象にして編集されるので、各地の地域性が必ずしも網羅されているわけではなく、また、国際理解のための諸外国との比較要素が十分に提供されているわけではないからである。教科書が国民の全国的な学習水準や均一的な質の向上を図ることに寄与するのに対し、その基準を活かしながら、各地域に生きる学習者のために教師は、生活や地域に根差した教材開発が必要となる。

設問5は、図画工作科・美術科教育における製作・制作過程では、学習者自身が自ら想像する部分・判断する部分が重要だから、その場면을授業者が教材にあらかじめ設定しておく必要があることを、認識させるための設問である。つまり、思考・構想させる仕掛けが必要なのである。また、アイデアを考案する際には、学習者に材料の性質、表現方法、道具の種類などの情報をたくさん提供しておくことも重要であり、実は、考案力によって製作・制作意欲が左右されることも見逃せない。

設問6は、カリキュラム編成に結びつく設問である。教科においては必ず教育目標が設定され、それらは、時代の要求を取り入れる形で成立している。教育目標に呼応して教授方法が変化し、その結果、児童の作品傾向も変化する。その傾向が学齢に適しているのか、発達段階に適しているのか、対象学年の設定について考えねばならない。自分が考えた教材(題材)について、なぜその学年でその題材を取り上げるのか、その必然性について必ず考えることである。たまたまその学年に設定した、というのでは論理が通らない。

### おわりに—教材作成の論理形成へ—

以上、図画工作科・美術科に関する指導力点検方法の一例をしめした。これをただのアンケートとはせず、ワークシートとして教員養成系の学生に配布し、下記の基本理念に関する問題に解答できるような学習体制をつくる。

#### 問題例

下記の設問について答えよ。

1. 外国人から見れば、日本の児童画はどのように見えますか。
2. 近年の日本の児童画の特徴や問題点はどのような点にありますか。
3. 図工・美術科の基礎基本について述べなさい。
4. 造形の楽しさの本質について、造形遊びを例にしながら論じなさい。

といった問題を作成する。

「日本の教育方法は児童の創造性を発揮させ、児童期の才能を伸ばすのに役立つものの、専門的な技術訓練としては必ずしもうまくいくとは思えない」「日本の教育は創造性を重視するが、技術面は比較的弱い」というのが、国際大会での全般的な意見であった。「下手も個性のうち」と言って、技術・技法を重視しなくなった姿勢を外国人は容易に見抜く。確かに、日本の近年の児童画は感覚的要素が豊かになった。しかし、描画発達段階上、小学校高学年で獲得されるはずの遠近・陰影法が獲得されていないなどの問題点も目立つ。児童画は大人の意識や要求を如実に反映するものであり、外国人に指摘された日本児童の絵の欠点は、我々大人の意識の欠落部分でもあると受け止めることもできる。再度原点に立ち戻って、画面技法(遠近・陰影・構成・分割・拡大法など)、水彩絵の具の技法、パレットや筆洗の使い方、両刃鋸・刃物の正しい使用法、接着剤の学習、画用紙の裏表の見分け方にいたるまで、基礎・基本的な内容を学ばせ、自分が設定したイメージ通りのものを着実に作りあげる技能を育てないと、現実的な「つくる喜び」は得られないことを、まず認識させることが肝要である。この問題作成の趣旨は、その認識のための点検にある。

また、「造形遊び」が学習指導要領に登場して以来、造形遊びの功罪は様々な視点で論じられてきたものの、「造形遊び」にとってかわる新教材の種類は考案されていない。ならば、むしろ感覚を育成する可能性を所持し、構成力を培うような知的な「造形遊び」を構築していくほうが建設的であろう。少なくとも何かの感覚が育っていると実感できる。ただし、開放感は味わえても習得への自信にはつながらないような、開放されただけの活動は避けたい。楽しいかもしれないけれども、それは実のある楽しさではないからである。教師は「造形遊び」を計画するときにはまず、その材料のもつ直観的な性質を吟味したほうがよいし、材料のもつ感覚的要素が最大限に発揮され、確実に発想や創造性に結び付いていく方向付けのある指導力の育成が望まれる。

さらに、評価をどのように展開し、評定をどのように設定するのかなど、論理的に授業を組み立てていく教師の力や指導力も教材研究を通して培われていく。そのためには、教材作成の論理とは何か、ということも指導方法の一環として学んでおかねばならない。学習の要点、つまり、何を重点的に学習させ、育みたいのか考えておくこと。これは「表現」「鑑賞」の共通事項であり、重点的に

学ばせる内容を教師がまず組み立てる必要がある。その組み立てや筋道が、学習教材開発の論理性になってくる。

論理の立て方にはさまざまな方法がある。その一手段として、鑑賞の授業ならば主要問題（スーパー問題）を作成したり、スーパー問題となりうる事項を考えつつ、その中から一つを選び、選んだ理由について考えておいたりする。それが教材設定の理由にもなる。そこで、次に必要になる学習内容は、教材研究における論理の確認（教材研究の要点確認表の作成）、すなわち、授業の論理性を確認しながら教材研究を行う必要があり、教材研究をする際に要点確認表を作成しておくとう便利である。今後は、教材研究のためのワークシート作成案を考案していく予定である。

#### 注

- 1) 「ある日のこと」(『図画工作5』、日本文教出版、1986年)、5頁。
- 2) 「ほっとするとき」(『図画工作5』、日本文教出版、1996年)、12頁。
- 3) 山本鼎『自由画教育』(アルス、大正12年<1923>)所収、口絵。
- 4) 「春の風を感じて／風が花をかざっている」(『新しい力で図画工作5』開隆堂、6頁)。

#### 引用文献

- ・向野康江『子どものための美術教育—学校での図画工作科教育と家庭でのART教育—』(弦書房、平成22年<2010>)